どうけん

家庭や地域で生かせる子どもとの関わり方

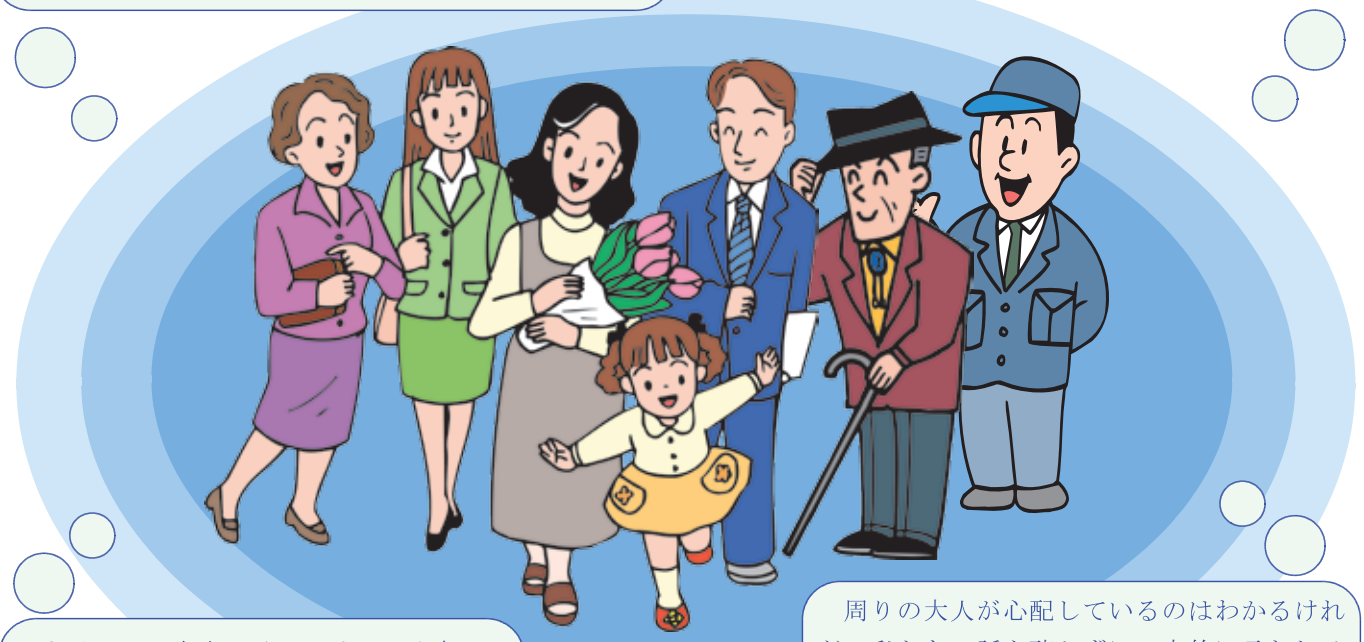
～教育相談の考え方や手法を活用してもらうために～

子どもたちが望ましい集団を形成し、将来にわたって豊かに責任をもって生きていくためには、学校が家庭や地域と連携を十分に図りながら様々な教育活動に取り組む必要があります。

保護者や地域の方々が集団活動などを通じて子どもたちと関わる際に、教育相談の考え方や手法を生かすことは、生き生きと主体的に行動できる子どもの育成や、愛情をもって子どもを育てていく家庭や地域の教育力の向上につながります。

職場体験の受け入れを頼まれたけど、生徒に仕事をやってもらうときには、私の仕事に対する思いや願いをしっかり伝え、納得してもらった上で取り組んでほしいと思っているんですよね。（地域の方）

学校で地域の方に体験活動の講師をお願いする予定です。子どもたちの活動がスムーズに進むために、何かいいアドバイスができればと思うのですが。（先生）



ウチの子、先生の言いつけはよく守るみたいなんだけど、学校の先生はどうやって話をしているのかしらね。（保護者）

周りの大人が心配しているのはわかるけれど、私たちの話を聴かずに一方的に言われると、つい口答えしたくなってしまいます。きちんと話を聴いてもらいたいなあ。（子ども）

学校が家庭や地域と連携する際に活用してください

北　海　道　立　教　育　研　究　所

出会う　活動の雰囲気をつくる

地域の方が講師となって体験活動等を実施する際に、主となる活動に向けた導入として、教育相談の手法である「構成的グループエンカウンター」の活動（エクササイズ）が活用できます。

「構成的グループエンカウンター」

「エンカウンター」とは、「出会う」という意味です。意図的に組み立てられたグループ活動を通して、集団のもつプラスの力を最大限に引き出す活動です。子ども同士の相互理解がすすみ、協力して問題解決する雰囲気をつくることができます。

講　師：エンカウンターには、いろいろな種類があるようですが、説明に入る前に打ち解け合うことができるようなエクササイズを紹介してください。

教　師：「質問ジャンケン」（右の例）はどうでしょう。短い時間で、交流ができる効果的なエクササイズです。

講　師：他にはどんなエクササイズがありますか。

教　師：自己紹介で活用できる「イエス・ノークイズ」やお互いの理解を深める「二者択一」などのエクササイズもあります。本やインターネットで調べると、ほかにもたくさん紹介されていますよ。

講　師：はじめてやってみるのですが、注意することは何でしょうか。

教　師：流れをあらかじめしっかり確認しておくことが大切ですね。実際の場面では、子どもたちの活動の様子をよく見て指示を出すようにするとよいと思います。

「質問ジャンケン」（例）

活動のながれ

① ペアになって座ります。
② 実施者は、ねらい、大まかな内容、ルール、留意点を説明します。
③ ジャンケンをして、勝った人は、負けた人に１つ質問をします。自分が聞かれて答えたくないようなことは質問しないようにします。
④ 負けた人は、質問に答えます。分からないことや答えられないことを質問された場合は、「わかりません」「答えられません」と言ってもかまいません。
⑤ ペアで、エクササイズを通して気付いたことや感じたことを交流します。

聴　く　気持ちを受け止める

子どもの話を聴く時、真意を十分に測らずに、つい軽く受け答えをしてしまったりすることはないでしょうか。子どもの気持ちや考えを上手に受け止めるために、教育相談の手法である「傾聴」や「受容」が活用できます。

「傾聴」と「受容」

教育相談においては、子どもの話に耳を傾けることを「傾聴」と言います。また、聞き手が自分の気持ちを脇において、子どもの気持ちを推し量りながら聴くことを「受容」と言います。

このような関わりを心掛けることで、子どものもつ「悩み」や「不安」の解決を手助けすることができます。

保護者：子どもが友だちとけんかしたことを話しかけてきたときに、「気にしても始まらないよ、大丈夫」と言ったら、「どうせ私のことなんか」とあまり話をしてくれなくなったんです。

教　師：自分の気持ちを分かってほしかったのかもしれませんね。そんなとき、「傾聴」といって、相手の話に耳を傾けるようにする関わりを意識するといいですよ。

保護者：子どもの話を聴いていると、「それは違うでしょ」とか「絶対にダメ」と、つい言ってしまうのです。そのことも子どもが心を閉ざしてしまうようになった原因の一つかも知れません。

教　師：そうですね。子どもが相談してきたときには、相手の気持ちにより添う「受容」という関わりも大切になってきます。どちらも教育相談では非常に大切にしていることです。

「傾聴」や「受容」を生かした関わり方

傾聴…子どもの顔を見ながらうなずいたり、受け止めの言葉を発したり、こちらから質問したりするなど、丁寧かつ積極的に話に耳を傾けます。
例：「うん、うん」「それは大変だったね」「つらかったんだね」

受容…反論したくなったり、批判したくなったりする気持ちを脇において、子どものそうならざるを得ない気持ちを理解しながら聴きます。
例：「そうだったんだね」「あなたの気持ちはわかるよ」

伝える　相手に思いを届ける

ボランティア活動等で地域の方々が、子どもたちと一緒に活動をする際に、子どもたちとの関わりをより円滑にする方法として、「アサーション」の考え方が活用できます。

「アサーション」

「アサーション」は、自分も相手も大切にする自己表現のことです。言いたいことがうまく言えなかったり、言い方が分からなかったりする場面で活用することができます。

相手に自分の思いを上手に伝えることができ、人間関係が深まります。

地域の方：子どもと接するのは、結構難しいですね。仕事のときは、「こうして、ああして」と言うことが多いんです。子どもたちにも、つい指示的になってしまうかもしれないなあ。

教　師：あまり強く言うと、子どもたちにとっては、押し付けに聞こえるかもしれませんね。でも、子どもたちの好きなようにさせて、アドバイスしたいことも我慢して黙っていても、子どものやる気は出ませんよね。

地域の方：私の思いをうまく伝えながら、子どもたちと気持ちよく活動したいのですが…。

教　師：「どうしたらいいか分からないかな？こうやると、きっと早く終わるよ」というように、子どものことを理解してあげた上で、言いたいことを伝えてみてはどうでしょう。

地域の方：確かにそういう言い方だと、うまく伝えられますね。

アサーティブ（アサーションを生かした）な表現の例

「この作業は面倒だよね。でも大事な手順なので丁寧にやってほしいんだ」

「わかってくれてありがとう。完成が楽しみだね」

学校の教育活動においては、次のことに留意して取り組みましょう

人間関係を深める

学校においては、子どもたちが構成的グループエンカウンターを実施することにより、自分や他者の理解を深め、温かな人間関係づくりのスキルを身に付けさせることができます。ねらいや目的に応じて様々なエクササイズがありますので、児童生徒の実態に合わせタイムリーに実施するとともに、ねらいを明確にし、単なる遊びにならないよう、けじめをつけることが大切です。

児童生徒理解を進める

子どもが安心して過ごしたり、自分の気持ちを分かってもらえたり、認められていると感じたりするためには、「安心感や楽しさ、充実感を与える」「よくほめる」などの関わりが必要です。

児童生徒理解を進めるには、傾聴や受容のほか、「繰り返し」や「明確化」など、教育相談の手法を理解し、取り入れることが大切です。

自己表現の力を高める

学校生活では、自分の意見が相手と異なることがあります。次の３つの自己表現を比較させるなど、子どもたちにアサーティブな表現のよさを理解させることが大切です。

３つの自己表現（誘いを断る場面の例）

①攻撃的（アグレッシブ）な自己表現
例：「ええっ、行きたくないよ、なんで私を誘うの？」

②非主張的（ノン・アサーティブ）な自己表現
例：「…うーん（行きたくないなあ）どうしよう…いいよ…」

③アサーティブ（アサーションを生かした）な自己表現
例：「誘ってくれてありがとう。でも今日は〇〇があるんだよね。だからこの次のときに一緒に行こうね」

連携して子どもを育むために「つ な が る」

学校では、様々な教育活動を通して、子どもたちが将来社会で自立し、自己実現が図られるよう指導、支援しています。

また、家庭における教育こそ、すべての教育の出発点であるとも言われています。

子どもは、住んでいる地域の中で、人との関わりによって様々なことを学びながら成長していきます。

子どもが互いを尊重し、ともに支えながら社会の一員として成長し、現在及び将来における自己実現を図っていくためには、学校と家庭及び地域が連携して、子どもたちの心身の健やかな発達を支えていくことが大切です。

北海道立教育研究所プロジェクト研究

「児童生徒の自己指導能力の育成に関する研究」

～教育相談の機能を生かした教育活動を通して～

本リーフレットは、道研が平成２５年度から２か年の計画で取り組んでいる標記プロジェクト研究の成果の一つとして作成しました。

本研究は、児童生徒の自己指導能力の育成に資することをねらいとして、教育相談の機能を生かした各教科等の指導計画と集団活動における家庭、地域との連携の在り方について調査研究を行うものです。

最終的な研究成果については、平成27年３月に道研Ｗｅｂページ等で報告をする予定ですので、ご活用ください。

自己指導能力の育成

「自己指導能力」は、児童生徒が自分で考え、自分で工夫をして、行動できる力のことです。主体的に行動できる力ということもできます。

子どもたちが望ましい集団を形成し、将来にわたって豊かに責任をもって生きていくためには、自己指導能力の育成が重要であると考え、本研究に取り組んでいます。

教育相談の機能を生かす

教育相談は、子どもたちのもつ悩みや困難の解決を援助することにより、子どもの好ましい人間関係を育て、生活によく適応させ、自己理解を深めさせ、人格の成長への援助を図るものです。

このような教育相談の機能は、日常生活や教育活動のあらゆる場面で生かすことができます。

北海道立教育研究所

〒069-0834　北海道江別市文京台東町42番地
TEL 011-386-4511　http://www.doken.hokkaido-c.ed.jp/